

規範的セクシュアリティの再生産と体育教師文化

－教員養成課程の学生に着目して－

三上 純 (京都教育大学)

1. 目的

本研究の目的は、以下の3点である。1) 教員養成課程の学生における性的マイノリティに関する知識と意識について明らかにし、セクシュアリティ、専攻に着目した分析を行うことによって、その特徴を明らかにすること。2) 保健体育専攻の学生における性的マイノリティに対する意識について調査し、その特徴を確認すること。3) 教員養成課程の保健体育専攻の学生を対象に、セクシュアリティに関する差別的な発言を見たり聞いたりした経験についてインタビューを行い、規範的セクシュアリティの再生産に対する体育教師の影響を検討すること。

2. 研究方法

質問紙調査の際に「1 戸籍上の性、2 性自認、3 性的指向」の回答を求め、「1 女性、2 男性、3 男性」であれば「規範的女性」、「1 男性、2 男性、3 女性」であれば「規範的男性」、それ以外の回答であれば「規範的でない性」であるとしてカテゴリーを行った。

1) 質問紙調査①

A 教員養成大学保健体育専攻の1～4回生と他専攻の4回生を対象に性的マイノリティに関する質問紙調査を実施し、対象者をセクシュアリティ(規範的女性か規範的男性か)と所属専攻(保健体育専攻か他専攻か)によって4つのカテゴリーに分類し、クロス集計及び χ^2 検定を行った。

2) 質問紙調査②

A 教員養成大学の保健体育専攻1～4回生を対象に、ホモフォビア尺度を用いた質問紙調査を実施し、ホモフォビア得点を算出した上でt検定を行った。

3) インタビュー調査

2)の質問紙調査で得られた協力者に対し、セクシュアリティに関する差別的発言を見たり聞いたりした経験についてのインタビューを行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。

3. 結果と考察

1) 質問紙調査①(結果:表1)

分析の結果、保健体育専攻の「規範的男性」において、ホモフォビア及びトランスフォビアが強く(表

1-a,b,c) 性的マイノリティが不可視化されている傾向(表1-d,e)が見られた。

2) 質問紙調査②

ホモフォビア得点の平均値は「規範的女性」が56.12、「規範的男性」が64.71であり、t検定を行ったところ有意差が見られた($t=2.948$, $df=113$, $p<.01$)。ホモフォビア得点は高いほどホモフォビアが強いことを示すため、「規範的男性」のホモフォビアは「規範的女性」よりも強いと解釈できた。

3) インタビュー調査

5名の分析から生成されたカテゴリー間の関係性の検討から、学校体育における性別による指導やセクシュアリティ・ジョークを通して、規範的セクシュアリティが再生産される様子が理解でき、その随所に体育教師の関わりが見られた。また、セクシュアリティ・ジョークは特に男性の問題と考えられた。

表1 セクシュアリティと専攻によるクロス集計結果

専攻・セクシュアリティ	保体・女	保体・男	他・女	他・男
a. 同性の人に言い寄られても嫌ではない	59.3% Δ^{**}	18.8% ∇^{**}	60.7% Δ^{**}	36.2% ∇^{**}
b. 男性なのか女性なの分からない人から誘惑されるのは嫌だ	68.5%	84.1% Δ^{**}	60.7% ∇^{**}	36.2%
c. 男性でも女性でもないという人はどこかおかしい	11.1%	21.7% Δ^{**}	4.9% ∇^{**}	17.0%
d. 身近に性的マイノリティの人がいる	44.4%	14.5% ∇^{**}	45.1% Δ^{**}	37.2%
e. 知り合いに「自身が性的マイノリティである」と打ち明けられたことがある	22.2%	11.6% ∇^{**}	36.1% Δ^{**}	26.6%

Δ :有意に高い ∇ :有意に低い

*: $p<.05$ **: $p<.01$

4. 結論

本研究では、学校体育における規範的セクシュアリティの再生産を読み取ることができ、その随所に体育教師の関わりが見られた。保健体育専攻の規範的男性が学校体育での経験を通してホモフォビアを強固にしていることが推測できた。

5. 主な参考文献

1) 藤山新・飯田貴子・風間孝・藤原直子・吉川康夫・來田享子(2014) 体育・スポーツ関連学部の大学生を対象としたスポーツと性的マイノリティに関する調査結果. スポーツとジェンダー研究 12: 68-79.